小町・中町 浮世をゆく

田辺聖子

実業之日本社

田辺聖子

小町・中町 浮世をゆく

実業之日本社

●著者略歴●
田辺聖子（たなべ　せいこ）
大阪市生まれ。樟蔭女子専門学校国文科卒。1963年、『感傷旅行（センチメンタル・ジャーニイ）』で第50回芥川賞、'87年に女流文学賞、'99年に読売文学賞ほか数多くの文学賞を受賞。現在は直木賞ほかの文学賞選考委員を務める。近著に『楽老抄』『セピア色の映画館』『古典の文箱』『ほっこりぽくぽく上方さんぽ』など。

小町・中町（こまち・ちゅうまち）　浮世（うきよ）をゆく

著者／田辺聖子
＊
初版第1刷／2000年3月25日

発行者／増田義和
発行所／株式会社実業之日本社
本社　東京都中央区銀座1-3-9／振替00110-6-326
郵便番号104-8233
電話03(3562)2051〔編集〕03(3535)4441〔販売〕
関西支局　大阪市北区曾根崎2-12-7　梅田第一ビル内
郵便番号530-0057　電話06(6312)1573
＊
印刷所／大日本印刷
製本所／石毛製本所
＊
©Seiko Tanabe　Printed in Japan　2000
落丁本・乱丁本は本社でお取り替えいたします。
ISBN4-408-53374-2

目次

永遠の美女 6
男運 12
身上相談 18
ジューシイ 24
生れ代り 30
わらじ酒 36
トトト……42
春場所 48
しおらしさ 54
バランス 60
太り肉(じし)美人 66
ひきがえる 72
さくらんぼ 78
エエとこ取り 84
博多の古典 90
キタナイ 96
田舎の風流 102
インターネット 108
父上いかにのたまうも 114
のっぺらぼう 120
縄文の島 126
〈おせいの文学コーナー〉 132

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ラッキーとハッピー　138
琉球の王様　144
老いぬれば……　150
気張らんと……　156
松茸うさぎ　162
壽(ことぶき)タクシー　168
かしこい女　174
オトナの酒　180
よんどころない春寒の夜　186
発想の転換　192
雛の宵酒　198
ひと花咲かす　204
浪花の春風　210
女のゆく酒場　216
ロマンスの星座　222
春も去(い)ぬめり　228
大阪のチカン　234
雨夜のムダ話　240
雨夜のムダ話　その二　246
究極のたのしみ　252
天神祭　258
立秋　264

装画／上田みゆき
装幀／中島かほる

小町・中町　浮世をゆく

永遠の美女

このあいだある会合で、酒の話題が出た。八十歳近い男性が、

〈私は毎晩、飲んでますなあ。戦争中と戦後の、酒のない時代をのぞいて、何十年、晩酌(ばんしゃく)は欠かさなんだことになりますワ。まあ、安酒でっけどな〉

といわれた。穏和でしっかりした人だ。私は、

〈ほほう〉

と感心したが、フト思いつく。

何だ、何だっ。

私だって飲んでるじゃないか?

〈あ、私もです。考えたら……〉

と、〈毎晩・晩酌組〉の一員であることを明かして、ついでに〈ご同様〉の意味で手を挙げた。

しかし考えると我ながらおかしい。

晩酌はすでに私の人生の一部になっており、ごく当然のことで、とりたてて言挙げすることではなくなっているのだ。つまり、考えないと（毎晩飲んでるかどうか）思い出せぬくらい、すんなり、私の人生に組みこまれた習慣になっている。人が毎晩飲む、というのを聞いて、〈ほほう〉という声が出るくらい、自分のは意識にものぼらぬ、ごくフツーの日常的営為であるのだ。

その、〈無意識酒〉を、今夜も飲んでいる。

私の飲み友達は、私よりやや年上の男友達、〈熊八つぁん〉と、やや年下（らしき）女友達、〈中町ちゃん〉である（このほかに中年の男友達、〈与太郎〉も、時々加わる）。

熊八つぁんは一座の長老格のトシだが、〈熊八老〉と呼ばれるのをいやがり、〈熊八のおっちゃん〉といわれるのも心外という。

〈むかし、カモカのおっちゃんという軽々薄々なる似而非才子がいたが、ワシはそういうものとは一線を劃してほしい。というて村夫子風に悟りすましてもおらんです。まあいうなら、市井のセイセンですな〉

は？　セイセンってなんです？

〈生仙。酒飲みの品格あるを酒仙といい、大天才の詩人を詩仙、歌よみの上手は歌仙、というように、ワシは人生の生き上手という意味で生仙ですなあ〉

しゃらくさい。

〈で以て、熊八老、などと呼ばれると勝手が狂う。敬老、なんていうこそばゆきコトバを思い出す。熊八爺さんも好かぬ。狸爺、狒狒爺を連想する。熊八つぁん、でよい。色気もソコハカとなくただよう、ってもんです。いや、呼ぶ人によるが〉

生仙の熊八つぁんは、脂ぎって、一向にトシヨリ臭くない。ほんとうに今日び、年齢不詳の男や女が多くなった。年齢は自己申告制にすればよい。

〈呼ぶ人によるったって、呼ばれる人にもよりますよ、熊八つぁんなんかに、色っぽい声をかける気もしないわ〉

というのは、これも年齢不詳美女の中町ちゃん。

なんで彼女がそう呼ばれるのかを話さないといけない。某日、私はある酒席で、

〈年とってかえって美人になる女がいる。ブスほどそうなる〉

という話題のとき、身を乗り出して、

〈そ、そ、あたいこの頃、伊丹小町、という評判高いんだよ。ま、昔もそれなりの美人でしたけど〉

といった。伊丹は私の住む小さい町である（大阪近郊だが、行政的には兵庫県だ）。

若い者は、小町が何者か、歴史的教養がないから、〈そういうおコメ、できたんですか〉などととんちんかんをいう。もちろん小町は日本史上、燦然と輝く美女の代表、小野小町にきま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

っているではないか。

その席の男たちは歴史的教養はあっても無残なる堅造ばかりであった。正直に、

〈ええっ、おせいが。……こ、小町って？〉

とのけぞっておどろく。中には、

〈まさか。……冗談きつい〉

と口走る奴もいる。可愛くない。本人が小町を詐称して喜んどるんやから、〈なるほど〉とか、お愛想にでもいわんかい。私は躍起になって言い添える。

〈この頃〝文壇の白雪姫〟という名もたかくって。誰が、ってこのあたいが。ホホホ……〉

その夜の男たちはみな悪酔いしたとあとで告白していた。私は以来、小町のおせいと名乗ることにしている。

飲み友達の年齢不詳美女は、おせいさんで小町なら、自分の美女度はその上をゆくから〈中町〉だと主張する。美女度も自己申告制である。それで彼女は〈中町ちゃん〉と呼ばれている。

今夜は友人のくれた新潟の酒を飲んでいる。

春の淡雪のようにかそけく、しかも中に、きりっとした芯のある吟醸酒だ。お燗をせず、冷やさず、室温なのが舌に快い。おかずは湯豆腐に、菠薐草のごまあえ、鯛のおつくり（ほんのちょっぴり。そのかわり活けのいいもの）、鰤の照り焼き。ちょうど京都からとどいたばかり

の千枚漬と水菜の漬物――京・大阪の家庭で、冬のおかず兼、酒のアテ（肴）としては、まあ恒常的普遍的なお惣菜（ただし若い者ではないから量は少ない。もはや、みな、口では何かと口幅ったいことをいうが、すでに牛飲馬食の時代は去っているのである）。

さて、美女のことだ。

〝年を重ねて夢失なわず〟というのは、私がよく色紙に書く文句だが、年を重ねて意外な美女に変貌するオンナというのはたしかに現代ふえた、と思う。後半生美女というか。

それは何でやろ？　ということになった。

〈ま、あたしはもとから、わりかし美女のほうですから〉

と中町ちゃんはさらりといい、

〈もと美女にして、いまも美人、というのは、これはブスが年を加えて美人になったというより、むつかしいんです。毎日の奮闘努力の積み重ねですから〉

〈車寅次郎みたいやなあ。しかし、日日の研鑽、という意味ではブスが年を重ねて美人になるほうが、スゴイと思うよ。あたいは若い頃ブスだったからようわかるんやけど〉

私は美人というのは、情報収集力によると思う。

生きすれていろんなチエがつく、そのチエつまり情報を取捨選択して、そして（ここが大事だが）自分に都合のいい情報だけ活用して生きてゆく、すると美女になるのだ。それを怠けると、あの美女が、というように、見るも無残な凋落ぶりをさらす。

〈あたしは、いつ持ちかけられてもすぐ臨戦態勢に入れる、という色気が、美女にさせると思いますが〉と中町ちゃん。
〈色気が緊張感を生んで、タダのおばはんと美女を分ける、という寸法ですね〉
〈まあ、情報も、緊張感も大事でっしゃろけど〉と熊八つぁんはいう、
〈個人的意見をいえば、まず、男が持ちかける、いう気ィにならん女は、美女やない、と思いますが〉
〈あたしたちじゃそんな気にならないというんですかっ〉
と息まく中町ちゃん。
〈まあまあ、それは。そういうたら芭蕉の句に、「浮世の果は皆小町なり」という佳句がおましたな。盛りの齢を過ぎれば、小町もついには骨皮小町、髑髏小町と……〉
〈それはむかしの小町、いまは時代が違うわよ、小町は永遠に美女なんですっ〉
と私。「っ」のつく勢いに恐れをなして熊八つぁんは、まあまあと、酒をついでくれる。

男運

私の今年のモットーは、
〈原稿より健康！〉
だ。
私はまあ、健康に恵まれているほうであろう。
人のすなる更年期障害もついに知らずにすんでしまった。おかげで女同士の集まりでじつに肩身狭かった。
〈あたしは心臓がドキドキして外出できなかった〉
〈あたしは眩暈（めまい）、冷えのぼせ、呼吸困難、……だいぶんこの頃マシになったけど、一時は乗りものに乗れなかった、汽車や飛行機の中で呼吸困難になると大変だと思って、……〉
〈あたしは不眠症だった、それに鬱（うつ）が加わって、何ともやりきれなかったわ。……いまもなおりきってない〉

なんて愁訴の大合唱の中で、私はどっち向いてたらいいのだ？　食欲はあり、酒はなんぼでも飲め、酔うと歌い踊り、枕にあたまをつけると、熟睡なんてもんじゃなく、ぐっすりどっぷり寝入って、朝はもう、ピカピカの人生・新入生という顔で起きてくる。そして、朝からの原稿催促の電話に、

〈えーっ、すみません、ゆうべ寝ずにナニしてたんですが、どうも出来なくて、今日はかならず……〉

なんていってたのだ。若いときから新聞連載小説はどこかへとぎれず書いていたし、月刊誌の連載、単発の短篇（これも雑誌へ書いてると、結局、毎月の連載と同じ結果になる）、週刊誌のエッセー、小説その他。

三十年間この調子で、今月はラク、という日はなかった。病気になっているひまもなく、私の病歴といえば、

①七歳のときの、扁桃腺炎。

②十三歳で腎臓をかるく、いわす（少し故障させた、とか、いためた、とかをいう大阪弁である）。

③四十歳、過労入院二週間。あとは宿酔（これは数知れずだが、ここ十年ばかりはそれもない）。

こんな病歴、恥かしくて人にもいえない。それに、文士というものは多病多感、不眠に悩み、

鬱病にとりつかれ……というイメージであるのに、私はママー人形の如く、横になると即、目を瞑って寝入る〈ママー小町〉である。睡眠薬というものを知らない。

鬱の気もない。

物書きの風上にもおけぬ、と思う人もあるだろう。

それに、六十の大台に乗ったころから、やっと仕事の調子が出てきた、と思える人間だ。

六十になるともう、やっぱりダメね、という物書き仲間もいるが、私は六十五、六のときのほうが仕事が〈ヨク出来タ〉などと思う、はしたない人間だ。これも人前で口にできない。

兼好法師は『徒然草』（これはナゼカ、男の好むなる古典で、男は『徒然草』にゆき、女は『源氏物語』に走る）の中で、

「友とするにわろき者」

を七つあげているが、その一つに、

「病なく身強き人」

というのがある。他の六つは、身分高い人（対応に困るからだろう）、若い人（話題やセンスが違いすぎるからか）、酒を好む人（というより、アルコール依存症のたぐいか）、勇猛な武士（暴力は出家・兼好の人生から最も遠いものだ）、その他、嘘つき、欲深。――などなど。

身体強健（すぎる）人、というのは病人に思いやりがない、従って情を解しない、ということだろう。人生について深く思いをひそめることができない、そういう上っつらの人間とは人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com